

魚のことは、釣り人に聞け

～自然再生は自然との対話から～

(財)北海道環境財団理事長 日本国際湿地保全連合・会長 辻井 達一



或る老釣り師の肖像 (佐々木栄松・画)

1. 自然は自らを再生する

“自然”は常に自らを再生する。それは大小を問わない。崩れた斜面は安定した傾斜になるまで崩落を続け、いったん蛇行し始めた河川はよしんば人が直線化を試みようとも常に蛇行に戻ろうとする。

人が造った斜面が崩落するのも、直線化した川が再び蛇行への方向を採るのも、何か“自然”にとって気に入らないことがあるのだ、と見るべきではないか。

人は、それが何なのかを確かめる努力をし、“自然”が納得するように修正しなければならない。或る建築家が、大きなホールにあった柱がどうにも目障りだ、ということになっていろいろと考えた末に柱を囲む飾り棚風な植え込みを設えることによってそれを解決した。彼は、これを「柱を成仏させる」と言い表した。

成仏とはいかにも仏教的な表現だが、それで広間が納まったとすればまさに柱は“成仏した”のであろう。と、すれば“自然”もまた成仏させてもいいではないか。

斜面も、川も、もし静まったとすれば、それは納得し、収まったのだ。自然の再生を唱えるならば、それは自然との妥協であり、手を打つことを目指さなければならない。

2. 自然と手を打つこと

では、手を打つとは何か。自然は人の問いかけに返事をするわけではないが、彼らの返事を形で表す。人は形から返事を読み取る必要がある。自然の言語を解説しなければ対話は成立しない。私たちは動物たちと対話できたドリトル先生(*注1)を見習

わなければならないのだ。

植物についていえば昔の腕の立つ植木屋さんはきっと植木たちと会話できたのではないか。だからこそ庭がちゃんと収まったのだろう。

河川ではまず水の動態が一番の課題になる。それは水文学的に、いわば物理学的な視点が必要なのは論を俟たない。次には生物学的な課題が出てくる。河川の自然再生ということになると、たいていはこの分野が大きな部分を占める。水中には魚から貝まで、水生昆虫からプランクトン、藻類、水生植物、水に依存する鳥類、両生類、爬虫類、そして哺乳類と目白押しだ。川の周りには草原や森林があってそれらもまた存在を主張する。

生物たちはいわば河川とその周辺部の先住民なのだから、権利を主張するのももっともだ、と考えるべきだろう。そこから対話が始まる。

*注-1: ヒュー・ロフティング作の子供読み物中の博物学者、動物語を解する。

3. 順応的対応とは自然との対話だ

話が付いたところで自然再生のプランが決定される(はずだ)。そしてプロジェクトが動き出すのだが、相手はなかなかにしたたかである。と、いうよりも構成要因(要員)がきわめて多様、多数だ。そこで百家争鳴、議論百出、言い忘れたこと、気が変わった点、こんなはずではなかったという文句、勘違いなどなどが出てくるのを覚悟しなければならないのだ。

ところが、これまでは概してそういうことに対する対応がお粗末を極めた。と、言うよりもてんで相手方すなわち自然という先住民の話を聞いていないのである。もっとも言い分を聞こうにも相手方の言葉が理解できない。先にも述べたように、そもそも言葉がわからないことには適切な判断に基づく対応など、できるはずがないではないか。対応ミスによる食い違いの生じる結果には恐るべきものがある。

けれどもドリトル先生には急にはなれない。練達のインタープリターがそうどこにでも居るわけではなかろう。居たとしても一人で魚の言葉から鳥の言葉までこなすというのは無理だ。最近の学生は(など言いたくはないが)フィールドがきらいで安全できれいな実験室仕事のほうが好きだし、バーチャルな場面でしか自然に対していないから、この傾向はなかなか修復できそうもない。まさに人間側の危機

的状况である。

最近は順応的管理という言葉も出てきた。当初の計画をさまざまな、あるいは予測できなかった条件変動にフレキシブルに対応して調整・修正することである。

4. 結果だが、河川はまさに生物的？

さて、結果だ。ここまで頭の中では事例として長くかかわってきた釧路湿原を置いてきた。

”水“という流体もまたきわめて生物的なのではないか。すると河川もまた？そして湿原ならなおさら？釧路湿原の自然再生の内、蛇行再生（というよりも旧川流路の再生・活用）はともかくも工事を完了して2010年2月に、折からの暖冬で氷結も少なく、溢水の恐れも小さいとあって30年振りに旧川に水が流れた。流れるべく計画したのだから当たり前ではあるが、やはり感動的な光景であった。

でも、まだ計画通りになったかどうかは様子を見なければわからない、とあって流れも、川岸への影響も、洲や淵のでき方も、そして魚をはじめとして生物相についてもいわゆるモニタリングが継続されることになっている。30年分を一挙に、というわけにはいかない。

しかし、少なくとも見かけ上は蛇行した川に水がゆったりと流れる光景はなかなかいいものだ。この“いいもの”という感覚的表現は数字では表せないが、それが生物的なのではないか。



図-1：釧路湿原の蛇行河川

湿原となるとなおさらに生き物めいてくる。雨でも降ったり、雪解けの頃には湿原は膨れ上がる。そして、その後にはゆっくりと水を排出する。人体に例えるならばまさに腎臓の役割そっくりだ。実際、ただ水を貯めたり排出したりする物理的作用だけではない。汚れた水はちゃんと濾してから流しだし、余分な栄養物質は吸収して片付けるからたいしたもの。

しかもそれ自体、成長を遂げる。湿性の植物が順序を組んで発達するわけだが、順番もまた整然たるものがある。

こういうのを相手にするにはやはり相手は生物の集合体だという認識で掛からなければならぬ。

5. ターゲットを決めて掛かること

目標がまず必要である。再生というからには何時の時点の、どういう形に、といういわば時間的なものと、空間的なものとの二つのターゲットがまず決められなければならない。

何時の時点に戻すか、という時には、その時点でのしっかりしたデータ（記録）が無ければならない。データと言ってもさまざまで、植物なり動物なりのきちんとした資料や標本でもあれば申し分ないだが場合によっては空中写真などでもいい。それも無ければ聞き取りを重ねてもいいだろうし、もっと昔のことなら古記録や絵図面でも役には立つ。

たとえば先に挙げた釧路湿原の例では、1980年にラムサール条約による登録湿地にノミネートした際、求められた必要条件を満たすための調査データに基づいて、1980年当時の状態を自然再生の目標と決めた。

もう一つ、千歳から苫小牧を流れる美々川は流程もせいぜい30kmの小さな河川だが、途中にはウトナイ湖という浅いがオオハクチョウやカモ類の集まるラムサール条約登録湿地が含まれ、きれいな水が流れるところとして知られてきた。それだけではなくて人との関わりもまた大きい。つまり昔からの交通路なのである。

ここの自然再生ではアイヌ民族が古くからこの川を石狩までのルートとしていたという史料に基づいて、下流域から出土した丸木舟（長さ約6～8m）が航行できるような河川状態を、そしてそうした丸木舟が建造できるだけの素材となるような桂（カツラ）の木が含まれる河岸樹林の再生が目標とされた。そして計画の初期段階には苫小牧市立博物館所蔵の丸木舟を検討会議の構成員など関係者一同で見学に行ってその資料を感覚的にも共有したのであった。

自然再生には、関わる人たちの意識共有が大切なのではないかと。共同調査などと言っても、専門家が



写真-2：美々川下流域出土の丸木舟
（苫小牧市立博物館蔵）

それぞれに自分の分野の調査を進めて、レポートももちろん別々に書き、それをバインドしたものが報告書として出てくる例が多い。それはただ同時にやった、というだけのもので共同調査ではあるまい。